



岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

Alcudia

O K A Z A K I
C I T Y M U S E U M S | VOL.25
N E W S



エッセイ

アルプおじさんを楽しもう

ハンス・アルプとゾフィー・トイバー＝アルプ

魅惑のサマルカンド

— 偉大なるシルクロードの遺産展

(収蔵品紹介)

ロベルト・マッタ『炎よ我らを食さん』

美博日記

ハンス・アルプ『キプロス風彫刻』
1931-38年 アルプ美術館蔵
BILD-KUNST, Bonn & APG-Japan/JAA, Tokyo, 2005
Photo by Nic Tenwiggenhorn

OKAZAKI
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館

アルプおじさんを楽しもう

岡崎市美術博物館ではハンス・アルプ展が始まったばかりのところだ。

今年の1月から3月まで葉山の神奈川県立近代美術館で催されたのを皮切りに、千葉県佐倉の川村記念美術館で4月から6月まで開かれて、こんど岡崎にやってきた。7月3日から9月4日までの2ヶ月間、ちょうど夏休みの間だから、お父さんもお母さんもお子さん連れでおおぜい見にいらしていただきたい。岡崎が終わると、そのあとは9月から11月まで群馬県の県立館林美術館にまわって、日本巡回展を終えてドイツのライン河畔のアルプ美術館に帰ることになっている。

岡崎美博では展示室の仕切りの壁（可動パネル）を全部とりはらって大きいホールひとつにし、そこに作品の大半を陳列した。油絵やレリーフやデッサンは壁に飾り、大小約40点のブロンズや大理石や木の彫刻は、ホール内のあちこちにアルプ風の曲線型の白い島をつくって、その上に並べた。

これがとてもいい。会場に入ったとたんに「わあ、おもしろい!」という声があがりそうになる。ダダイストであり、シュールレアリストであり、抽象作家であり、理論家であり、詩人でもあったアルプズ生まれのハンス・アルプ（1886—1966）という芸術家の生涯の全貌が、そのひとの生きたすがたが、いっぺんに眼に入り、こちらに語りかけてくるような気がして、興奮してくる。

4年前のマックス・エルンスト展のときも展示ホールを半分に仕切って、その一方にエルンストの小型の彫刻作品をたくさん据えて、一種の彫刻の森をつくった。あれもまことにゆたかな、ぜいたくな感じで、たのしかった。こんどのアルプ空間はそれ



《具体彫刻—人物》に顎を乗せるアルプ 1954年

にもまさって大きく、私たちがたちまちこの芸術家の感覚と頭脳の世界のなかに誘いこむ。

入り口近くにかかげられたアルプ晩年の自画像（1965）を見ただけで、この画家が親しみ深くなる。暗いグレーと白でむやみに大きく鼻や口が描かれ、眼は半分閉じて半分開いているみたいで、これはまるでアフリカの部族の祭りの仮面のようだ。いや、薄闇のなかで笑っている秋田男鹿のナマハゲのお面のようだ。会場入り口に飾られたアルプ68歳の肖像写真は、自作のまるっこい彫刻に両手をかけ、あごをのせてこちらを見つめていて、いかにも理智と思索の哲人アーティストという風貌だ。だが、このナマハゲ風の顔はちょっと不気味だが、その三角にとんがった頭のなかにたくさんの詩や物語りを宿していて、笑いながらゆっくりとこちらに語りかけてくれそうな気がする。

それに、この顔の絵なら、小学校の3年生や4年生でも「ぼくのお父さん」あるいは「わたしのおじ



館長
芳賀
徹



いさん」と題して描けそうな気さえしてくるではないか。まねして描いてみると、はじめてアルプ先生の油彩の筆触の強さ、自由さが並みのものではないことがわかってくるのかもしれない。

彫刻作品はどれもみなおもしろい。ブロンズや大理石のまるみがほのかに官能的で、優雅で、手でなでさすりたくなる。ユーモアがありながら、部分の曲線も全体のかたちもすどく流れていて、ほんの少しもゆるがしような完璧さの快感を与える。そして最後には、ぜひわが家の居間の一角に、あるいは書斎の一角に、これを置いて、朝な夕なになでさすったり、眺めたりして、これと語りあいたいと思わずにいられなくなる。

「横たわる」と題されたブロンズ（1960）は、たしかに大きなお母さんが肘をまげて頭を支え、ゆったりと横になってテレビでも見ているようなすがただ。だが私は、はじめ一見したとき、これは大きな黒いねずみかと思った。ちゃんと耳が二つあり、尻尾まである。片手の指を折り曲げて、壁に狐の影絵を映したときのことも思い出した。これが人体だとわかったのは題名を読んでからのことだ。アルプの作品を見てたのしむには、この私のような自由連想を大いに働かせても悪くはないだろう。シュールレアリスムというのは、人間の心の底のさまざまな想念や情念を既成概念の枠から解放して、自由に表現する試みでもあったのだから……。

「逃亡前」（1963）という白い大理石の彫刻には、その題名からすれば第2次大戦中にドイツ軍の進出を前に夫妻でフランス南部やスイスに逃げた経験が、あるいは想起されているのかもしれない。しかし頭も胸も腰もあまりにまろやかに美しい立像からは、そんなに切迫した気配は感じられず、むしろふくよかなマリア様の像を連想する。中世ロマネスクの教会の壁画や浮彫りにはよくマリアと幼児キリストの「エジプトへの逃亡」が描かれていたが、あるいはこの「逃亡」の意味だったろうか。もう一つ、「翼のある存在」（1961）という茶褐色のブロンズ

像も、息を呑むほどに美しいまさに完璧な作品だが、私はこれにも、衣のなかに幼児キリストを抱きしめるマリアのすがたを想い浮かべた。「逃亡前」もこれも、どちらも頭部を少しかしげているところに、愛情とともに憂いの表情が読みとれる。

頭をかしげているといえば、今回私たちのポスターに使った「葉ートルソ」（1963）というブロンズ作品もそうだ。アルプは「葉はトルソに変身する。トルソは花瓶に変身する……」と、自分の制作の根にある「メタモルフォーゼ」（変身）の考えを述べたことがあったが、このブロンズ像はその思考の実験の作なのかもしれない。たしかに木の芽が空中に伸びて葉が蕾かになりかけて、それがそのまま人体に変身しているようにも見える。だが私にはひょろひょろと背の伸びた頭でかちの女の子に見えて、まことに愛らしい。その女の子が「はてな」と立ち止まって、なにかいぶかしがって首をかしげているすがただ。

この展覧会を見に来る人たちが、大人も小学生も一番面白がって笑いだしながら見るのは「7つのアルパーデン」と題されたリトグラフ7点のシリーズ（1923）ではなからうか。「口髭のかたちをした帽子」は、まるで「蛸の八っちゃん」が3本足で踊っている図だ。その蛸が「海」の浪に吞まれて、ただぼっちゃりと丸い「へそ」になり、その「へそ」を呑み込んだ魚が眼を白黒させ、ぼいと吐きだしたら足が2本に目玉が1つの小蛸になって、バタバタと泡を立てたら、こんどはむっくりと大きい男になった。でもやっぱり「8」ちゃんだった……などとわざと漫画風の読みをして、このアルプおじさんのユーモアを子どもたちと楽しんでみたいものである。クルト・シュヴィッターズが名づけた「アルパーデン」とは、「アルプの俳諧」というぐらいの意味だろう。

おとなたちの心を解放し、子どもたちの心をかしくしてくれる——それがハンス・アルプの展覧会だ。

会期 平成17年7月3日(日)～9月4日(日)

ハンス・アルプとゾフィー・トイバー＝アルプ

学芸員 千葉 真智子



1.ハンス・アルプ、ゾフィー・トイバー＝アルプ 《輪のリズム》1919年

ハンス・アルプの個展となる今回の展覧会には、アルプ以外のひとりの制作者の名前が含まれている。彼の妻で、《輪のリズム》《アンフォラ》(図版1,2)の共同作家「ゾフィー・トイバー＝アルプ」である。ゾフィーは、彼女自身、近年高く評価されるようになった芸術家であるが、二人の出会いは、1915年にアルプがチューリッヒにあるタンナー画廊で開いたグループ展をゾフィーが訪れたことに遡る。以来、1943年に一酸化炭素中毒という不慮の事故で亡くなるまで、アルプにとって、ゾフィーは実質的な共同作家として、またインスピレーションと制作意欲の源として欠くべからざる存在となったし、死んでもなお、《ちぎられたゾフィー・トイバー＝アルプとハンス・アルプのドロイング》(図版3)に見られるように、アルプは彼女との共同作品を別の作品に作り変えることによって、彼女を新たな制作の糧にした。アルプはゾフィーを讃える。

バラと星々
ゾフィーの顔は滲えている
彼女の心のやさしさを
彼女の魂の純粋さを

そこでアルプにこのような詩を詠ませたゾフィー・トイバーについて、また彼女とアルプとのかかわりについて簡単ではあるが述べてみたい。



3.ハンス・アルプ
《無題(ちぎられたゾフィー・トイバー＝アルプとハンス・アルプのドロイング)》
1947年



2.ハンス・アルプ、ゾフィー・トイバー＝アルプ
《アンフォラ》1917年

美術・工芸におけるゾフィー&アルプ

スイス生まれのゾフィー・トイバー(1889-1943)は、幼い頃から母親の教えのもとで手芸に親しみ、その後も1914年まで、ドイツの最も先進的な美術工芸学校において、ヴィルヘルム・フォン・デブシッツからアカデミックな方法に拠らぬ新しい芸術の教えを受けた。このような経験の持ち主であるゾフィーと、アカデミックな教育を嫌い、スタラスプールやヴァイマル、パリの美術学校を転々としながら半ば独学で学ぶことを選んだアルプとが共感しあったのは、いわば必然とも言えることであった。

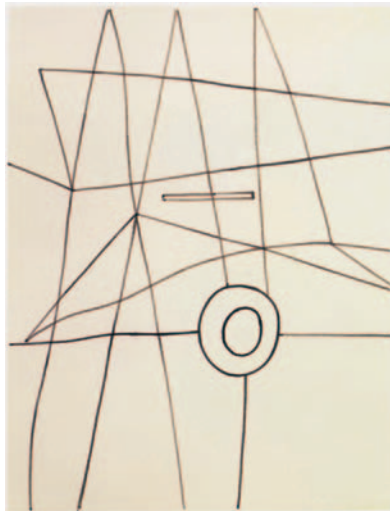
さて、1915年の出会いについて、アルプが「ゾフィーは水平・垂直だけを用いたデッサンとタペストリーと刺繍を私に見せた。」と回顧したように、彼女は純粋芸術よりもむしろ工芸の制作に深く関わり——実際この種の作品は、アルプ夫妻の家計を支える重要な収入源であったし、ゾフィーは、1926年のフランス移住後も、1929年までチューリッヒの美術工芸学校の教授職を務めたほどであった——、また一貫して構成主義的な水平と垂直の組み合わせや、円・三角・四角などの基本的形態を用いていた。(図版4)一方、同じように単純でありながら有機的な丸みのある形態を好み、またダダの特異とする「偶然



4.ゾフィー・トイバー＝アルプ
《水平と垂直によるコンポジション》1916年



5.ハンス・アルプ、ゾフィー・トイバー＝アルプ
《夫婦の彫刻》1937年



6.ハンス・アルプ、ゾフィー・トイバー＝アルプ
《デュオ・デッサン》1937年



7.ハンス・アルプ制作の衣装を着て踊る
ゾフィー・トイバー＝アルプ 1916年

の法則」に基づく「コラージュ」の手法——トリスタン・ツァラ、またアルプ自身も、新聞や雑誌から切り抜いた雑多なフレーズを任意に組み合わせるといった偶然の法則を用いて、「意味を持たない」詩を創作していた——を、造形分野において最も的確に実践したアルプ。二人の交流は、一方でゾフィーの直線的な画面に傾きや曲線をもたらし、また一方で、アルプの側に、幾何学や左右対称の形態に対する関心と、タペストリーの制作という工芸分野への一歩を促した。

さて、これとは別に、より直接的なやりとりの中から生まれたのが、「①1916-19年のグワッシュやコラージュなどの平面作品、②1930年代の彫刻作品、③1939年のデッサン帳」という三種の共同作品、いわゆる「デュオ作品」で、これら一連の作品においては、二人の基本造形と、各時代における各々の志向が分かりやすく共存し、共鳴し合っている。例えば、①の「デュオ・コラージュ」は、権威的な芸術を批判したダダ時代の作らしく、ハサミや時には裁断機——人間の手の動きが全く影響しないという点で、非常にダダ的である——で切断した幾何学的な紙片を画面上にパラパラと落とし、「偶然」落ちたその場所にそのまま紙片を貼り付けた作品である。また②の直線と曲線の組み合わせから成る2体のデュオ彫刻「夫婦の彫刻」（図版5）「杭」は、二人がともに彫刻やレリーフに専心した1930年代の作で、日用品と彫刻との境界に位置するような、工芸を経験した二人ならではの作風となっている。そして、理想的な結実ともいえるべきか、③の「デュオ・デッサン」（図版6）では、意図的に親密な感じのする手描きのデッサンが用いられると同時に、もはや、どちらがどの線を引いたのかを区別することが不可能なほどに、二人の線は交じり合い、溶け合うに至ったのである。

こうしてみると、いかにゾフィーがアルプにとって大きな存在であったか、また二人の交わりが、いかに豊かな造形をもたらすことになったのかが分かるだろう。

ダンス・舞台芸術におけるゾフィー&アルプ

アルプは、ブルジョワ社会と伝統的芸術の否定運動として始まったチューリッヒダダの主要メンバーであり、ゾフィーもまた、エミー・ヘニングス（フーゴ・バルの妻）と並ぶ稀有な女性参加者であった。このダダの最も大きな特徴の一つが、アトリエでの孤獨な制作というお決まりの芸術家像を離れて、仲間同士で

集まっては、異なる言語で同時に詩を読み、踊りを披露するなどの「見世物」的パフォーマンスを繰り返したことで、1916年の夏以来、著名なルドルフ・フォン・ラバン主宰のダンス教室で舞踏を学んでいたゾフィーは、「ダンサー（舞踏家）」として、またアルプは詩の朗読に加え、舞台装置およびゾフィーの衣装——仮面と全身を覆うその衣装は、非西欧的で、よりプリミティヴなものへの傾倒を示している——を全面的に手がけるなどして、共に重要な役割を果たした。（図版7）

さて、ゾフィーの舞踏の経験、より厳密に言えば、舞踏を「空間のデッサン」に例えたラバンを介して体得した舞踏の抽象的なリズムは、彼女の幾何学的でありながら詩的で動的なものを喚起するテキストスタイルやデッサンの画面構成に影響を与えたとされる。この点については、アルプもゾフィーのうちに生じた舞踏と造形芸術との融合を次のような詩に詠んでいる。

彼女は踊り、夢見た。
三角と四角を
円の中の三角を
円の中の円を

ただしゾフィーの舞踏については、抽象的で幾何学的なリズムだけが問題とされるべきではない。それは、アルプの造形芸術にも通じる「自然」というモチーフを喚起したという点で、より私たちの関心を引くのである。ヘニングスは、ゾフィーの軽やかな動きを、空に羽ばたく小鳥、太陽を讃歌する花に例え、彼女の舞踏が自然と大地の世界に同化する様を描写している。またアルプも、ゾフィーの舞踏に言及する中で自然へと言葉を進める。「私は、ゾフィー・トイバーのうちに一羽の鳥を、一羽の若き雲雀の姿を見ていた。なんと驚くべき軽やかさ。それは、大地に触れていることを忘れさせるような動きである。」と。星座を描き、常に自然を参照したアルプにとって、ゾフィーの舞踏は大きな魅力を秘めていたに違いない。その舞踏を形容するのは、アルプ自身の造形を描写するかのごとき言葉たちなのである。

ゾフィーはアルプの造形と詩作の源であった。このようなアルプの心のありようを思いながら、今回の展覧会を見ると、その一つ一つの作品が豊かな果実のように見えてこないだろうか。

会期 平成17年9月10日(土)～10月16日(日)

魅惑のサマルカンド — 偉大なるシルクロードの遺産展

学芸員 荒井 信貴

NHKでは今年から「新シルクロード」シリーズの放映が始まり、再びこのいにしへの絹の道の名を耳にすることが多くなってきています。古都長安（現西安）から河西回廊を経て敦煌へ、道は三本に分かれさらに西へと向かいます。天山山脈の北に広がる草原を駆け抜け、あるいは天山の南、崑崙山脈とに挟まれたタリム盆地の大半を占め、ウイグル語で「入れば二度と出られない。」を意味するタクラマカン砂漠に足を踏み入れ、南北両縁に点在するオアシスをたどり西へと向かっていきます。その最西端の街がカシュガルですが日本人の描くシルクロードについてのイメージはどれもこのあたりで留まっているようです。日本も含めた東アジア世界の中での異国情緒として親近感が沸くのが今の中国新疆ウイグル自治区までなのでしょうか。この地域は東トルキスタンとも呼ばれていましたが、道は二つの山脈やパミール高原を越えさらに西へと延び、西トルキスタン、今の中央アジアの国々へと繋がっていくのです。9月10日から始まる企画展「偉大なるシルクロードの遺産展」は、日本人にはまだあまり知られていない中央アジアのシルクロードを、ウズベキスタン、タジキスタン両国の資料により紹介していきます。張騫が汗血馬を求めたフェルガナ（大宛国）、軍事交渉に赴いた大月氏（バクトリア）、玄奘が『大唐西域記』に記す石国（タシケント）、康国（サマルカンド）、安国（ブハラ）などインドへの途路に見た豊かな国々は、いずれもこの地域のことなのです。

この展覧会では、シルクロードを西へ西へという言葉は、西から、そして東へという言葉に替わります。古くはアレクサンダー大王によりこの地にギリシア文化が伝えられ、ガンダーラからは仏教文化、またペルシャの文化も広く伝わってきます。そして、この地域の人々がそれらの文化を携え東へと向かっていくのです。東野治之さんの『正倉院』と題する岩波新書に、正倉院に遺された香木に文字が



サマルカンドのバザール

刻まれており、後にそれがソグド文字と判明したことが記されていました。この文字を使っていたのがソグド人、今のサマルカンドを流れるザラフィshan川流域の人々で、タクラマカンのオアシスや敦煌、長安にも移住し、本国との間を繋ぐシルクロード交易の中枢を担っていたことが知られています。その証の一端が古代日本にも伝えられていたのです。

この地域はやがてイスラム化され、また交易も内陸部から海のシルクロードへとその主要ルートを替えていきますが、15世紀にはティムールが帝国を築き、首都をサマルカンドに置くとともに、イスラム圏の中心地のひとつとして独自の文化を打ち立てていきます。サマルカンドは「イスラム世界の宝石」「東方の真珠」と呼ばれ、サマルカンド・ブルーに輝くモザイク・タイルの建物群やバザールの賑わいは、今でも往時の繁栄の一端を遺し、世界遺産にも指定されているのです。

7世紀に始まる日本の遣隋使・遣唐使は、朝鮮半島の国々と異なり、その主眼が文化の輸入にあったと言われています。彼らの眼差しは、中国の多くの文物とともに、遙か砂漠を超えてやってきた容貌の異なる人々や物にも注がれていたに違いありません。異国の歴史や文化への理解が、両者の距離を少しでも縮めることができればと思います、シルクロードへの眼差しを西へ向けます。



ティムールの眠るグリ・アミール朝

ロベルト・マッタ

炎よ我らを食さん 1988年

油彩、カンヴァス 270×498cm

後期シュルレアリスムを代表する画家マッタは、アニミズム⁽¹⁾、プリミティヴィズムなどを統合した独自の世界をカンヴァスに表出させ、戦後の抽象表現主義の画家たちにも多大な影響を与えた。

シュルレアリスムの指導者、アンドレ・ブルトン⁽²⁾は1944年に次のように語っている。

「マッタその人のうちなる霊媒は、同時に、私の知るかぎりもっとも澁刺とした、もっとも年若い、もっとも生氣あふれる存在であり、彼においてはじめて見られる、二度目にはもう見られないすべての光景は、全面的アニミズムの原理にもとづいて理解されることをもためている。」⁽²⁾

このようにブルトンが指摘したとおり、初期のタブローから一貫して見られるマッタのアニミズム的表現は、幅5メートルにもおよぶ、この晩年の大作においてひとつの頂点を示している。

画面右側には原初的な動物存在を、左側には未知の存在（画家自身であり生命力の象徴）を深遠なる宇宙的空間に対置させ、中央には高輝度の顔料で炎をタシス

ム的に描出することによって巡回する空間のダイナミズムを強調している。このように、ひとつの画面のなかに具象的形態と抽象的形象、物質の要素的要素と心理学的表象とを融合することで、マッタは、独自のアニミズム的空間を創出しているのである。

ブルトンは前出の言葉を次のように結んでいる。「マッタこそは、もっとも効果的に星をかがげつづけ、おそらくは至高の秘密に達するための道を、すなわち火の支配の道をたどっている者である。」⁽³⁾

(1) アニミズムとは、事物のうちに靈魂（アニマ）などの靈的なものが存在し、様々な現象は、その働きによるものとする世界観のこと。

(2) アンドレ・ブルトン「シュルレアリスムと絵画」巖谷國士訳 人文書院 1997年 p.216

(3) 同書 p.219



美博日記



ゴールデンウィーク最後の5月5日、市内の葵、城北、東海、竜海の4つの中学校の美術部から44名の生徒を招き、堂本印象展の鑑賞と施設の紹介を兼ねた見学会が開催されました。

午前10時すぎ、美博正面入口にバスが到着。緊張した面持ちの生徒たちを出迎え、まずはセミナールームへ。ここで開催中の展覧会「堂本印象展」について簡単な説明を行い、担当の荒井学芸員の案内で展示室へと移動。学芸員のわかりやすい説明に耳を傾けながら、生徒たちは戦前戦後と画風を大きく変貌させた堂本印象の作品ひとつひとつを熱心に見入っていました。本物の作品を眼の前にして、生徒ひとりひとりの表情がとても輝いていたのが印象的でした。

さて、展覧会鑑賞の余韻もそのままに、次に向かったのは地下1階。今回の見学会では、普段公開していない施設の裏側についても特別に紹介。搬出入口、一時保管庫、燻蒸室、スタジオ、収蔵庫など、はじめて目にする場所とあって生徒たちの表情も興味津々。ちょっとした探険気分を味わいながらの見

学は、美術博物館をより深く知ってもらいたい機会になったようです。2時間足らずの短い間でしたが、参加してくれた生徒たちが再び美術博物館を訪れてくれることを願いつつ、私たちは生徒たちの乗ったバスを見送りました。

この見学会は、美術博物館がプログラムとバスを準備し、図工美術部の先生方を通して生徒の参加をよびかけることによって実現した初めての試みですが、学校と美術博物館との連携実現に向けてのきっかけになればと思います。

(以上 I.M記)



INFORMATION

■ 展覧会スケジュール

2005年7月3日(日)～9月4日(日)

ハンス・アルプ展

ドイツ、フランス及びアルザス地方土着の文化が混交するストラズブルに生まれたハンス・アルプ。彼は、ダダ、シュルレアリスム、抽象・創造等の前衛芸術運動に関わりながら、画家、彫刻家また詩人として独自の制作を展開しました。アルプ美術館の全面協力を得た本展では、「偶然の法則」「幾何学・シムメトリー」等、彼の作品を特徴付ける8つのテーマを設け、およそ160点に及ぶ多彩な作品を紹介します。

2005年9月10日(土)～10月16日(日)

魅惑のサマルカンド ―偉大なるシルクロードの遺産展

ユーラシア大陸内陸部を東西に結ぶシルクロード。ここを舞台にキャラバンを率いて交易に携わり、文化交流に大きな役割を果たしていたのが、今のサマルカンドを中心としたソグドの人々でした。彼らの故郷、中央アジアはアレクサンダー大王の活躍、カニシカ王の仏教普及、チムール帝国の繁栄など豊かな歴史と文化を誇っています。展覧会ではウズベキスタンの資料を中心にその一端を紹介していきます。

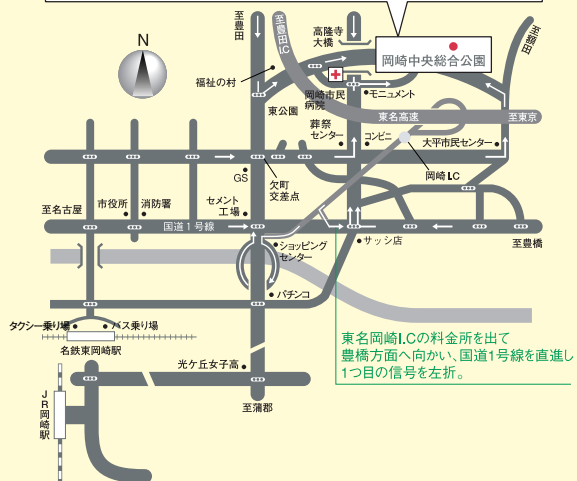
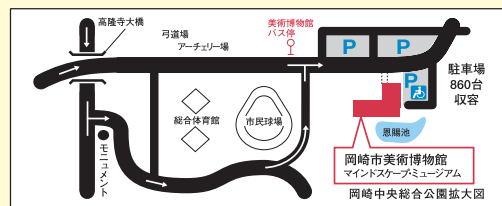
2005年10月22日(土)～12月4日(日)

田中吉政とその時代展

田中吉政(1548-1609)は、近江に生まれ、戦国時代から江戸初期を生き抜き大名となった豊臣武将です。秀吉の甥の秀次に付けられたのち、天正18年(1590)には大名として取り立てられて岡崎城主となります。城と城下町の造成、矢作川築堤など大きな足跡を岡崎に残しています。本展では、吉政を三河時代のみならず、近江時代、筑後時代など生涯を通じて紹介することにより、その人物像に迫ります。

- 開館時間／午前10時～午後6時(6月1日～9月30日)
午前10時～午後5時(10月1日～3月31日)
午前10時～午後8時30分(6月～11月までの土曜日)
〈入館は閉館時間の30分前まで〉
- 休館日／毎週月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
年末年始(12月28日～1月3日)
※展示替えのため臨時休館することがあります。

- ◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、
(名鉄バス) 「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分
- ◎タクシー／名鉄東岡崎駅から約15分
JR岡崎駅東口から約20分
- ◎自家用車／東名高速道路・岡崎ICから約10分



OKAZAKI CITY MUSEUM



【岡崎市美博ニュース/アルカディア】

- Arcadia 第25号 ●2005年7月発行
- 編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

岡崎市美術博物館

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL0564-28-5000(代表)

ホームページ <http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/ka111.htm>



6月から土曜日の開館時間が午後8時30分まで延長されています。これにあわせ映画の上映など夜のイベントも数多く予定しています。ライトアップされた夜の美術博物館に一度足を運んでみてはいかがでしょうか。(I.M)

